

日本における「いばら姫（眠れる森の美女）」の受容
— 明治期を中心に —
Reception of “Dornröschen(Sleeping Beauty)” in Japan:
Focusing on the Meiji Era

山田 麻姫
Yamada Maki

要旨

本稿の目的は、明治期の日本における「眠り姫（いばら姫）」の邦訳を分析、考察することで、この昔話が当時の日本人にどのような形で受容されていたのかを明らかにすることである。

調査の結果、明治期には 11 話の邦訳が存在することが判明した。内容はグリム版の原文にほぼ忠実な訳が 1 話、ペロー版にほぼ忠実な訳が 1 話、グリム改変版が 6 話、ペロー改変版が 1 話、グリムとペローの内容を混成した改変版が 1 話、創作版が 1 話である。原文との相違点に着目したところ、改変点が一致する英訳を数話発見することができた。これによって、邦訳者たちが使用したと思われる底本をほぼ確定することができた。その結果、邦訳者たちによって改変された箇所も多く存在することが判明した。邦訳者による改変は、主な読み手である子どもたちの読解力や当時の日本の道德観を意識したためであろう。さらに、当時の独和辞典や英和辞典を調査したことで、邦訳者たちが使用したと思われる辞書も確定することができた。

明治期の日本における「眠り姫（いばら姫）」の受容に関する研究は、これまでほとんどなされてこなかった。したがって、今回の発見は、日本におけるグリム童話またはペロー童話受容の研究の端緒を開くものである。

キーワード

日本での受容 眠り姫 いばら姫 眠れる森の美女 明治期 グリム童話 ペロー童話

1. はじめに

明治期の日本における「眠り姫（いばら姫）」の受容に関する先行研究は、岡田知子「“La Belle au bois dormant”の日本における受容—『西洋仙郷奇談』「睡美人」を中心に—」（修士論文）¹が存在する。しかしこれは最初の邦訳である井上寛一訳「睡美人」にのみ焦点を当てたもので、その他の邦訳については触れられていない。明治期の各邦訳については川戸道昭/榊原貴教/野口芳子編『日本におけるグリム童話翻訳書誌』²と川戸道昭/榊原貴教編『児童文学翻訳作品総覧』³があるが、この 2 冊は訳者、収録本、出版社、出版年といった書誌情報のみを紹介している本である。そのため、明治期における受容に関しての論文は、本稿が最初のものになると思われる。

本稿の目的は、明治期に訳されたペロー版とグリム版の話を中心に、その内容を分析し、考察していくことである。

2. ペロー版とグリム版の内容の相違について

「眠り姫 (いばら姫)」はヨーロッパ各地に多くの類話が存在するが、明治期の日本に伝わった話は主としてシャルル・ペローの「眠れる森の美女」とグリム兄弟の「いばら姫」である。呪いをかけられた王女が紡錘に触れたことで 100 年の眠りに落ち、その後自分を目覚めさせた王子と結婚するというあらすじは共通している。そのなかで両者の相違点を具体的に挙げると、以下の 10 点になる。王女誕生の予言を受ける存在がペロー版にはなく、グリム版にはあるという点、宴の招待者の人数がペロー版では 7 人 (+1 人) であるが、グリム版では 12 人 (+1 人) であるという点、招待者たちに用意されたものがペロー版は食器、金の箱、ルビーやダイヤモンドで飾られた純金製のカトラリーであるが、グリム版は金の皿であるという点、招待者から王女への贈り物の内容がペロー版では美しさ、賢さ、優雅さ、ダンスの才能、歌の才能、楽器の才能であるが、グリム版では徳、美、富であるという点、妖精 (賢女) のひとりが招かれなかった理由がペロー版では 50 年も塔に閉じこもっていたため死んだか、姿を消したと思われていたが、グリム版では金の皿が 12 枚しかなかったためであるという点、王女が 100 年の眠りに落ちる年齢がペロー版では 15 歳か 16 歳であるが、グリム版では 14 歳 (生まれてから 15 年目の年) であるという点、王女と共に 100 年間眠り続ける人々のなかにペロー版では両親は含まれないが、グリム版では両親が含まれるという点、王女が目を覚めたのはペロー版では 100 年経ったからであり、グリム版では王子が王女にキスをしたからであるという点、王子と結婚する際ペロー版では両親の合意がないが、グリム版では両親の合意があるという点、ペロー版では結婚後に王子の母親についての話が続くが、グリム版ではふたりの結婚で話が終わるという点などである。

よって、これらの相違点から各邦訳がペロー版とグリム版のどちらを訳したものであるのかを判断することができる。また本稿では、訳のニュアンスに若干の違いが生じていたとしても話の展開に大きな変化がなれば忠実訳⁴、原文には存在しない場面などの加筆や改変、省略が一部でも加えられているものは改変版として定義する。

3. 明治期における受容の概観

今回の調査では、国立国会図書館、三康図書館、新潟県立図書館のほか、古本を取り扱う通販サイトなどを利用して資料の収集をおこなった。その結果、明治期の日本に導入された「眠り姫 (いばら姫)」は 11 話存在することが判明した。翻訳者とその題名に関しては、以下のとおりである。

- ①井上寛一訳「睡美人」『西洋仙郷奇談』東陽堂 1896 (明治 29) 年 5 月
- ②中村道夫訳「ドルンレースヘン」『エンゲリン第二読本直訳意解』金刺芳流堂 1896 (明治 29) 年 8 月
- ③えい子訳「薔薇姫」『家庭雑誌』第 102 号 家庭雑誌社 1897 (明治 30) 年 5 月
- ④中村道夫訳「荊薔薇」『ボック氏第三読本直訳註解 上之巻』金刺芳流堂 1898 (明治 31) 年 8 月
- ⑤山君訳「茨姫」『萬年艸』第 6 巻 萬年艸発行所 1903 (明治 36) 年 6 月
- ⑥橋本青雨訳「薔薇姫」『独逸童話集』大日本国民中学会 1906 (明治 39) 年 3 月

- ⑦ 訳者不明「ねむり姫」『ABC 雑誌』東西社 1907 (明治 40) 年 12 月-1908 年 (明治 41) 年 3 月
- ⑧ 熊本謙二郎訳「睡美人」『英学界』有楽社 1908 (明治 41) 年 1 月-2 月
- ⑨ 内田八千代訳「永き眠り」『女子文壇』第 4 巻 第 18 号 女子文壇社 1908 (明治 41) 年 12 月
- ⑩ 吉岡向陽訳「睡美人」『家庭お伽噺 第四十六篇』春陽堂 1910 (明治 43) 年 8 月
- ⑪ 日野蕨村訳「百年の眠」『ドイツお伽噺:家庭講話』岡村書店 1911 (明治 44) 年 2 月

4. 各邦訳の分析

1) ①井上寛一訳「睡美人」

井上寛一訳「睡美人」は『西洋仙郷奇談』に収録されており、現時点では最も古いペロー版の邦訳である。内容は原文にほぼ忠実であるが、宴の招待者に用意されたものについて、ペロー版の「すばらしい食器」、「黄金の箱」、「ダイヤモンドとルビーをちりばめた純金のスプーン、フォーク、ナイフ」を井上は「美しい玉の皿一個」、「黄金の手匣」、「宝石を鑲めた金の食匙、肉叉、肉刀」と訳している。また、王女が眠りに落ちる場所もペロー版は塔であるが、井上訳では「小舎」となっている。カトラリーや塔を当時の日本人にも理解しやすい表現で訳そうとしたのであろう。井上はこの他にも、フランス語の“Fée” (妖精) を「仙女」に、ゴッドマザーを「御法の母」⁵に、王子を「公達」に、子どもたちの名前である「オロール (暁)」を「朝姫」、「ジュール (太陽)」を「輝丸」に、“Ogres” (人食い) を「啖人鬼」に、人食いの王妃が子どもたちを食べる際の「ロバートソース」⁶を「ロバート醤油」と訳している。

西洋の物語を日本の読者が違和感なく受け入れられるような工夫は挿絵にも見られる。「睡美人」には山本昇雲によって描かれた 2 枚の挿絵が添えられており、城の人々が眠っている場面と、人食いの王妃が子どもを食べようとしている場面がそれぞれ見開きで描かれている。どちらもペロー版に存在する場面だが、ここでは和服を着た登場人物や日本風の家屋、骸骨、人食い鬼の姿などが迫力のあるタッチで描かれているのだ。

訳者の井上寛一 (控齋) は慶應義塾に在籍し、『西洋仙郷奇談』の補修者である矢野龍溪の門下生であった⁷。そしてこの「睡美人」には「原名 The Sleeping Beauty in The Wood」と記されているのだが、1858 年に J. R. プランシェが同じタイトルで英訳を発表している。プランシェの訳が掲載されている英訳本 (“*FOUR AND TWENTY FAIRY TALES*”, 1858)⁸には『西洋仙郷奇談』に収録されている作品がすべて掲載されていることから⁹、井上はこれを底本に使用した可能性が高いと先行研究で岡田知子が推測している¹⁰。

2) ②中村道夫訳「ドルンレースヘン」

中村道夫訳「ドルンレースヘン」はドイツ語読本である『エンゲリン第二読本直訳意解』に収録されている。①井上訳はペロー版の訳であるため、この「ドルンレースヘン」が現在確認できているもののなかで最も古いグリム版の訳といえる。『エンゲリン第二読本直訳意解』には直訳と意訳の 2 種類が収められており、どちらも文語体で書かれている。

原文との相違点としてまず挙げられるのが、宴の招待者に用意されたものである。グリム版で 13 人の賢女のうち 1 人が招待されなかった理由は金の皿が 12 枚しかなかったため

であるが、中村による直訳では「彼レノ國ニ於テ十三ノ皿ガアリシ、如何ントナレバ彼レハ併シナガラ其レニ就テハ彼レラガ食スルデアラウトコロノ只十二ノ金ノ皿ヲ持チシ故ニ左様ニ彼レラノツガ内ニ止マラネバナラザリシ」と語られている。つまり、国には 13 枚の皿があったが、金の皿はそのうちの 12 枚であったと説明されているのである。国内に 13 存在したのは賢女であったのに、中村は皿と誤訳しているのだ。意識ではこの文をさらに「饗應スベキ皿ガ一國ニ十三ノ皿アルヲ知り然レドモ其内ノ一皿ハ王ガ所有セリ」と訳している。つまり、13 枚の皿のうち 1 枚は王が所有していたため枚数が足りなかったとなっているのである。そしてここでは皿が金であるか否かについては触れられていない。

招待者たちから王女へ贈られたものについても、グリム版では「徳、美、富」が挙げられているが、中村の直訳では「徳、華美、家」となっている。原文では 3 つ目の贈り物は“Reichtum”であり、これは「富」と訳されるべきなのだが、当時のドイツ語辞書（『挿画増訂 独和辞典大全』1885 年）¹¹に“Reichtum”という言葉はなく、旧字体である“Reichthum”のみが「富」という意味で掲載されている。おそらく中村は『独和辞典大全』に“Reichtum”という単語がなかったため「王国」を意味する“Reich”を直訳で採用し、まず「家」と訳したが、その後、下の項目に“Reichthum”という単語があるのを見つけて、意識では「富」と訂正したのではないだろうか。また、2 つ目の贈り物である“Schönheit”（美）という単語も『独和辞典大全』には載っておらず、“schön”が「華美ナル」と訳されていた。

さらに、塔の上で出会った老女が糸車で紡いでいたものについても、原文における“Flachs”（亜麻）を中村は「麻」（Hanf）と訳している。前述した『独和辞典大全』を確認したところ、“Flachs”が「亜麻」ではなく「麻」と訳されていることが判明した¹²。その他の辞書で“Flachs”を「麻」と訳しているものは、福島鳳一郎訳『挿図 和譯獨逸字彙』（1889 年）の 1 冊のみで、それ以外の辞書では「亜麻」と正確に訳されていた¹³。したがって、中村が使用した辞書は前述の『挿画増訂 独和辞典大全』か『挿図 和譯獨逸字彙』のいずれかであろう。『挿図 和譯獨逸字彙』では“schön”に「華美ナル」という訳語がなかったため、『挿画増訂 独和辞典大全』が使用された可能性が高い。

訳者の中村道夫については、調査したが詳細は不明である。『エンゲリン第二読本直訳意解』と後述の『ボック氏第三読本直訳註解』両方の奥付には「譯述者 中村道四郎」と記述があり、これが中村道夫の実名であると推測できるがそれ以上の情報は得られていない。そのため中村道四郎（道夫）について明らかにすることが今後の課題である。

3) ③ えい子訳「薔薇姫」

えい子訳「薔薇姫」は『家庭雑誌』という文学雑誌に掲載されており、文末に「此^{ものがたり}譚は獨乙國にて最も普通に行はるゝお伽物語なり」とあることから、グリム版の訳であることがわかる。えい子訳の冒頭では、避暑のため訪れた離宮で王妃が入浴していると、そこに 1 匹の^{ひろ}蛭が現れて王女誕生の予言を授ける。グリム版に登場する予言者は蛙であるが、「蛙」と「蛭」の漢字が似ているため、誤植の可能性が考えられる。えい子訳では予言から 2 年後に王女が誕生するのだが、2 年という具体的な年数が示されているのもグリム版とは異なる点である。招待者から王女への贈り物も、グリム版の「徳、美、富」ではなく「親切な心」、「美しい御容貌^{きりよう}」、「御金持」となっており、王女と城の人々が 100 年の眠りにつく場面でも屋根の上にとまっていた鳩が「御手飼^{おてがい}の鳥」と訳されている。茨に覆われた城に

ついでに描写でも「物見のやうな高いものさへも、見えぬ程に成長して居りました」と、グリム版で「旗」である部分が「物見」に変えられている。王女が眠りから覚める場面でも、王子が他目^{よそめ}もふらず見とれていると王女がちょうど目を覚ましたと語られており、眠っている王女に王子がキスをする場面がえい子訳では削除されている。

そのほかにも、15歳の誕生日を間近に控えた王女が両親の留守中に城のあちこちを見て回る場面で「勿論幾百年と経つた御城で、代々の王様と女王様より他には誰も御通しにならない處や、種々の御寶物^{ほうぶつ}などがありました」と、原文にはない説明が加えられている。王女の噂を聞いて各国から訪れた王子たちが茨の生垣で命を落とす場面でも、「遂そ今まで唯御一人として目的を御達しになつた方はございませんでした。唯だひどく御痛^{おいたみ}をおぼへてよわつて、御歸りになる方ばかりでありました」と、死の描写が削除されているなど、グリム版の訳でありながらも改変点が多岐にわたる内容となっている。

訳者の「えい子」については名前しか記述がなく、どのような人物であるのかについては残念ながら不明である。

4) ④中村道夫訳「荊薔薇」

「荊薔薇」は、②「ドルンレースヘン」と同じ中村道夫によるグリム版の邦訳である。この訳はドイツ語教本である『ボック氏第三読本直訳註解』に収録されており、②「ドルンレースヘン」と同様に直訳と意訳の2つが掲載されている。

グリム版や②「ドルンレースヘン」では冒頭で王妃に予言を授ける蛙が登場するが、この「荊薔薇」では予言の場面が削除されている。底本であるボックの原典(“Lesebuch für die mittlere und ober Stufe”)を確認したところ、“kriegen immer keins. Endlich aber bekamen sie ein so schönes Mädchen”¹⁴(いつも子どもは授からなかった。しかし、ついにきれいな女の子が授かった[拙訳])と、予言者が登場しない内容になっていることから、この改変は中村ではなくボックによるものであることが判明した。

また、②「ドルンレースヘン」と同様に「荊薔薇」でも、直訳と意訳で内容が大きく異なる箇所がいくつか存在する。②「ドルンレースヘン」で誤訳されていた、招待者に用意されたものや王女への贈り物は、「荊薔薇」の直訳ではグリム版に忠実な訳となっている。しかし意訳では王女への贈り物についての言及はない。王から賢女たちへの贈り物である12枚の金の皿について「此金皿ハ世界ニテ珍重スベキ物ヲ載セテ之レヲ贈リ祝ヒタリ」とあるのみで、「賢女たちから王女への贈り物」については語られていないのだ。そのため、成長した王女について描写される場面でも、賢女たちから贈られた人徳や美が成長した王女にあらわれたのかどうかについては触れられていない。

さらに、宴の招待者である賢女たちが直訳では「宜キ女」と訳されているのに対し、意訳では「親族始メ知己ノモノ」に含まれており、原文の“weise Frau”を表す言葉が存在しない。呪いが成就する日も、直訳では「丁度十五才老イテアリシトコロノ日」となっているが意訳では「或ル時」としか語られておらず、直訳と比べて意訳は細かい描写などが全体的に省略されている。

また、王女が眠りに落ちる場所は直訳では「古キ塔」であるが、意訳では「塔ノニ櫓」となっている。ボックの原典では“alten Turm”(古い塔)としか書かれておらず、階数については言及されていないため、これは中村による改変であろう。茨に覆われた城につい

ての描写も、直訳では「而シテ遂ニ全キ城ヲ左様ニ取圍ミ而シテ其ノ上ニ全ク最早ヤナク一ノ旗デサヘ屋根ノ上ニ見ルヘクアラザリシコトホド生ヘ上リシ」とあり、「屋根の上の旗すら見えなくなった」と語られているグリム版に忠実な訳となっている。しかし意識では「城ヲ圍メル荆棘ハ笑ヲ帯ビ人ヲ招クノ状を呈セル如キ」とあるのみで、グリムの原文や直訳とは内容が異なっている。さらに、王女が目を覚ます場面も、直訳では「而シテ彼レハ彼レニーノ接吻ヲ與ヘシ」とグリム版に忠実だが、意識では「其時早く夜ハ忽チ黎明ニ近ク暁ノ鐘告ゲ渡ル」となっている。意識では眠っている王女を王子が見つけたときに夜が明け、鐘が鳴ったことで城中が眠りから覚めるという内容に改変されているのである。グリム版やボックの原典では王子からのキスで目を覚ますため、この改変もやはり中村によるものであろう。

そのほか、直訳では城が茨に覆われる場面で「然シナガラ話ガ土地ニ於テ美シキ眠ムルトコロノ薔薇カラ達セシ何レトナレハ左様ニケーニグストホテルト名付ケラレシ」とある。ボックの原典を確認したところ“Es ging aber die Sage in dem Lande von dem schönen schlafenden Dornröschen, denn so wurde die Königstochter genannt”¹⁵（しかし、その国では美しい眠っているいばら姫の伝説が伝えられた。というのは、王様の娘はそう名付けられたからです〔拙訳〕）となっている。これはおそらく複合語である“Königstochter”（王様の娘）の意味を中村がわからずに「ケーニグストホテル」と誤訳してしまったのであろう。

以上の比較から、「薔薇」の意識は直訳よりも省略や改変が多く加えられており、直訳の方がグリム版やボックの原典により近い内容であるといえる。

5) ⑤山君訳「茨姫」

山君訳「茨姫」は『^{まんねんそう}萬年艸』という文芸雑誌に収録されており、グリム版にほぼ忠実な訳となっている。原文と明確に異なっている箇所は、塔の上で出会った老女が紡いでいたものが「亜麻」ではなく「麻」になっている点のみである。

訳者の山君とは森鷗外の息子である森於菟（1890-1967）の筆名である。昭和23年に父の鷗外との共訳として出版された『しあはせなハンス』のあとがきで、於菟は『山君』は父が付けてくれた筆名で、「山の神という意味で、『史記』によればやはり虎の異名なのである」と語っている¹⁶。そして『萬年艸』に収録された「茨姫」は父の鷗外が手を加えたもので、「私が譯文をもつて行くと、父はすぐ筆をとりレクラム版の原書と照し合わせながらいねいになおしてくれた。父の添削は誤譯や日本文としてのまちがいを正すばかりでなく、時によると私の原稿が朱でまつかになつてしまうこともあつた」と於菟は述べている¹⁷。当時12歳であった於菟の「茨姫」が原文にほぼ忠実な訳となっているのは、父である森鷗外が手を加えたためである。

6) ⑥橋本青雨訳「薔薇姫」

橋本青雨訳「薔薇姫」は『独逸童話集』に収録されている邦訳である。この訳はエドガー・テイラーの英訳本（“German Popular Stories”, 1823）¹⁸に収録されている話“Rose-Bud”と共通する点が多く見られる。まず、橋本訳の冒頭では王妃が川岸を散歩していると川のなかから小さな魚が顔を上げて王女誕生の予言を授ける。グリム版で王妃に予言を授ける

存在は蛙またはザリガニであるが、テイラー訳を確認したところ”one day as the queen was walking by the side of the river, a little fish lifted its head out of the water.”¹⁹（ある日、王妃が川のそばを歩いていると、小さな魚が水から顔を上げた。〔拙訳〕）と、グリムの原文には存在しない「魚」が登場することがわかった。ほかにも、橋本訳で塔の戸に刺さっていた鍵は「黄金の鍵」であった。グリム版で黄金の鍵が出現するのは初版（1812年）と第2版（1819年）であり、第3版（1837年）から決定版（1857年）までは「錆びた鍵」となっている。そのため、邦訳と英訳のどちらにおいても決定版の「錆びた鍵」が出現する場合がほとんどであるが、テイラー訳ではここでも”golden key”（黄金の鍵）が出現するのである。茨に覆われた城についての描写を見ても、橋本訳では「遂には御殿の屋根も煙筒も見えないほどにあつく延びました」と、グリム版には存在しない「煙筒」が出現する。テイラー訳でこの場面を確認したところ”not even the roof or the chimneys could be seen.”²⁰（屋根も煙突も見えなかった〔拙訳〕）となっており、その他の英訳で”chimney”（煙突）が出現するものは発見できなかった。

以上のように、橋本訳にはテイラー訳と共通する改変箇所が多く存在するが、必ずしもテイラー訳を忠実に訳しているわけではない。たとえば王女が眠りに落ちる場所がテイラー訳では”old tower”（古い塔）であるのに対し、橋本訳では「御殿の奥庭にある古い二階立の家」となっているなど、テイラー訳には見られない改変も存在する。この「二階立の家」について調査したところ、日本では江戸時代の1650年に幕府が地上3階以上の建物の禁止令を出しており、多くの建物が2階までの高さで建設されていたことが判明した²¹。つまり、塔のような高い建物は当時の人々に馴染みがなかったため、読者が情景をイメージしやすいように橋本が改変を加えたのであろう。ほかにも、招待者たちから王女への贈り物はテイラー訳では”virtue”（徳）、”beauty”（美）、”riches”（富）となっておりグリム版の内容と一致するのだが、橋本訳は「知恵、美^{ママ}はしい容色、お金」となっている。王女と城の人々が眠りにつく場面でも、テイラー訳で”the meat that was roasting”（焼いた肉）が出現するところを橋本は「火串に刺した魚」と訳している。王女が眠りから覚める場面でも、橋本訳では倒れて眠っている王女を王子が助け起こしたときに目を覚ましたとなっており、王子からのキスで目を覚ましたテイラー訳とはやはり異なっている。さらに橋本訳では塔の上で老女が紡いでいたものが亜麻や麻ではなく「絲」となっており、繊維にまでは言及されていない。

訳者の橋本青雨（1878-1944）は本名を橋本忠夫といい、東京帝大独文科を明治37年に卒業後、ドイツ文学を中心とする翻訳に従事し、のちに中央大学教授を務めた人物である²²。彼は童話の教育的価値を認め、童話を児童の教授材料の中心として扱ったヘルバート派と呼ばれる教育者であった²³。「薔薇姫」が収録されている『独逸童話集』の出版に関わった樋口勘次郎は「童話教授につき」という序文で、グリム童話の教育的価値を認めたいうで「之れを我國の児童に語るにあたりては餘程取捨選擇をした上に、尚若干の變化を加へて話すといふことが必要」とし、「此等の話が、此の書によつて日本の各地に傳播せられて後、次第に我國人の思想と口とによつて潤飾せられて、日本風の童話となつてしまはんことは、誠に望ましいことであります」と述べている²⁴。橋本訳に改変された点が多く見られるのは、おそらく樋口が序文で述べているような考えからであろう。

7)⑦ 訳者未記載「ねむり姫」

「ねむり姫」は『ABC 雑誌』に掲載されている邦訳である。『ABC 雑誌』は明治 39 年より東西社から創刊された中学生低学年向けの英語雑誌で、「ねむり姫」は英語との対訳になっている。はしがきに「此は名高き”Sleeping Beauty in the Wood”と云ふ無邪氣な短篇昔噺である。短篇ではあれど一度には出し切れず、三四回に渡る」²⁵とあるように、明治 40 年 12 月に発行された第 3 巻第 8 号から翌年 3 月に発行された第 4 巻第 2 号までの 5 回に分けて話が掲載されている。”Sleeping Beauty in the Wood”という原題やその内容からペロー版を訳したものであると思われるが、英訳の時点で大幅に改変されており、ペロー版に忠実な訳とはいえない。

「ねむり姫」は冒頭で王と皇后に娘を授ける存在として「情深い神女」(kind fairy) が登場する。ペロー版には子どもを授ける存在は登場しないのだが、後述の⑩吉岡訳「睡美人」では「ねむり姫」と同じく、王女誕生の予言を授ける「女神」が現れる。⑩吉岡訳は前半がペロー版、後半がグリム版という構成になっており、冒頭で登場する予言者以外の点では「ねむり姫」と異なる箇所も多いため、この 2 話が同じ底本を使用した可能性は低い。だが、両者ともグリム版ではなくペロー版を訳したものであることから、当時出版されたペロー版の英訳には「冒頭で女性の予言者が登場する」というパターンのもものがいくつか存在していたのではないかと推測する。

「ねむり姫」では王女が誕生すると、洗礼式に 7 人の神女 (fairies) が招かれる。しかし、ひとりだけ招待されなかった”old fairy”は「神女」ではなく「老魔女」と訳されている。同じ”fairy”という語を「神女」、「魔女」と表現を変えて訳すことで、作中における善と悪の対比を際立たせようとしているように思われる。また、招待者たちに用意されたものもペロー版とは異なり「金のお皿」(golden plate) と「銀の椅子」(silver chair) となっている。⑩吉岡訳にも金の皿は出現するが、これはペロー版ではなくグリム版に出現するものである。ペロー版には「すばらしい食器」としか書かれておらず、金で作られているものはカトラリーとそれを入れるための箱である。「すばらしい食器」という表現から、カトラリーと同じような材質と判断して「金製」と訳したのか、あるいはグリム版の金の皿と混同されたのかもしれない。しかし「銀の椅子」はペロー版にもグリム版にも出現しない。招待者たちから王女への贈り物についても「ねむり姫」では 1 人目が美、2 人目が賢さ、3 人目が優しさと慈悲深さ、4 人目が歌と演奏と踊りの才能となっている。ペロー版で 3 人目から贈られた「優雅さ」が「優しさ」と「慈悲深さ」になっていたり、5 人目から贈られた「歌の才能」と 6 人目から贈られた「楽器の才能」が 4 人目からの贈り物である「ダンスの才能」と一緒にまとめられているのである。

さらに、「ねむり姫」で王女が 100 年の眠りにつく日は「16 歳となったとき」と語られているのだが、この段落につけられた見出しは「姫十六歳の夏」である。これは王と皇后が出かけた先が「避暑地」(summer place) であったためであろう。1885 年に出版された英訳本 (“Three Fairy Princesses”)²⁶に収録されている”The Sleeping Beauty”や、③えい子訳「薔薇姫」²⁷など、作中の季節が夏であると語られている訳は他にも存在する。ペロー版やグリム版では季節は特定されていないことから、おそらく英語に翻訳された際に付け加えられたものであろう。

そして王女が眠りにつくとき、呪いを和らげた神女がとつぜん現れ、両親以外の城の人々

を眠らせる。ここでも、ペロー版に登場する人や動物のほかに、油受け鍋に甘い汁を入れて持った料理人、食物部屋で大杯と細い口の壺で獨り御樂み最中の御膳掛、栗を盗む道化男、下男の耳を殴る下女という、ペロー版には存在しない人々が加筆されており、それぞれの様子が細かく描写されている。元の話には存在しないものが出現する邦訳は③えい子訳「薔薇姫」の「御手飼の鳥」や、⑥橋本訳「薔薇姫」の「火串に刺した魚」などもあるが、これらは原文に出現する「鳩」や「串に刺さった肉」が変化したものである。したがって、原文に存在しない登場人物たちが大幅に追加されている明治期の邦訳は、現時点ではこの「ねむり姫」のみとなっている。

その後、眠っている王女を皇子が見つかる場面でも、王女の姿について「みづみづして櫻色」(fresh and rosy)と、やはりペロー版にはない描写が加えられている。“rosy”を「櫻色」と訳している点については、注釈で「〔本義〕＝薔薇色の〔適譯〕＝櫻色の」と説明されていることから、誤訳ではなく日本人の読者により馴染みのある表現へと意図的に変更されたということがわかる。そして王女が目を覚ます場面でも「皇子はお姫さんの上へソーツと乗りかゝつて接吻をしました」とあり、キスシーンのないペロー版とは異なる内容となっている。王女が目を覚ますと翌日に2人は結婚し、古い御殿を出て城へ向かい、皇子の父親である王に会う。それから一緒に楽しく暮らし、人々からも慕われ、王女は「森のねむり姫」(The Sleeping Beauty in the Wood)という名前で広く知られたと語られて「ねむり姫」の話は終わる。ペロー版では、王子は王女と結婚したことや子どもが生まれたことを両親に隠し続け、父の死後、王位を継承してから初めて王女と子どもたちを自分の国に連れ帰る。しかし、人食いの血を引く王子の母親から、王女と子どもたちは命を狙われるという後日談が続くのだが、「ねむり姫」では英語版の時点でそれらの内容がすべて削除されているのだ。

訳者については記載がないため不明である。しかし『ABC雑誌』の編集者であり英語教師でもあった内藤明延が、この雑誌のほとんどの記事を執筆していたことから、おそらく彼の訳であると思われる。

8) ⑧熊本謙二郎訳「睡美人」

熊本謙二郎訳「睡美人」は、『英学界』という英語雑誌に英語との対訳で掲載されている。熊本訳の特徴は、王女が「ロザモンド」(Rosamond)という名前と呼ばれているという点である。これについて調査したところ、ルーシー・クレインの英訳本(“Grimm's Fairy Tales”, 1882)²⁸に収録されている話“The Sleeping Beauty”に“Rosamond”という名前が出現することが判明した。その他の英訳で「ロザモンド」という名前が出現するものは確認できなかったため、熊本はクレイン訳を底本に使用したと思われたが、対訳の英文を見るとクレイン訳とほとんど同じ文章であるものの完全には一致していないことがわかった。たとえば、クレイン訳では城が茨に覆われる場面で屋根の上に“vane”(風見)が立っているという描写がある。熊本訳でこの場面を確認したところ「屋根の先の方を除いては何一つ見えなくなりました」とあり、対訳も“nothing of it could be seen but top of the roof.”²⁹とあるのみで、クレイン訳に存在する風見は出現しないのである。そのため、クレイン訳の影響を受けた改変版などが底本に用いられた可能性も考えられる。

また、王女が眠りに落ちる場所である“old tower”(古い塔)を「古い^{やぐら}」、そこへ続

く”winding stair”（螺旋階段）を「廻り梯子」と熊本は訳している。これは塔や螺旋階段が当時の日本でまだ馴染みがなかったためであろう。さらに城が茨に覆われた場面の”the thorns held fast together like strong hands”³⁰という文を、熊本は「荊が丸で強力な男が手を握り合せた様に繋がり合つて居た」と、元の文には存在しない「男」という言葉を加えて訳している。

そのほか、グリム版と異なっている箇所は塔の上で老女が紡いでいたものが「麻」になっているという点である。対訳には”flax”（亜麻）とあり、注でも「flax＝亜麻（麻の類）」と説明されているにも関わらず、訳者の熊本は「亜麻」ではなく「麻」という言葉に訳しているのだ。おそらく熊本は、塔や螺旋階段と同じく当時の日本人には馴染みのない亜麻を避けて、「麻」という言葉を採用したのであろう。

訳者の熊本謙二郎（1867-1938）は、帝国大学の法務科を中退後、兵庫県尋常中学校、大阪府尋常中学校、第三高等学校、東京高等師範学校、学習院などで教授を務めた人物で、「睡美人」が掲載されている『英学界』では「学習院教授 熊本謙二郎」と紹介されている。「睡美人」は英語からの翻訳であるが、熊本と同時期に学習院に務めていた長澤英一郎は『英語青年』という英語雑誌で「先生は獨逸語も佛蘭西語もやつてをられた」と語っている³¹。つまり「睡美人」は英語のほかにドイツ語とフランス語も理解できた人物による翻訳なのである。したがって熊本は前述の”flax”の訳について、ドイツ語訳（中村訳②・④）でも”Flachs”が「麻」と訳されていることを確認していたのかもしれない。

9) ⑨内田八千代「永き眠り」

内田八千代「永き眠り」は『女子文壇』という文学雑誌に掲載されている話である。この話では、500年ほど昔、ある国に王女が生まれる。王女の命名式が開かれると、そこに1人の女神が現れ、「十八の年になれば、悪魔のために、永き眠りに着くであらう、それ故に、國中に糸繰器械を皆毀して、見せてはならぬ」という予言を授ける。月日は流れ、18歳になった王女の元へ1通の手紙が届く。それは女神が予言していた悪魔からのもので、王女は手紙を読むと「急に氣狂ひの様に」^{にわか きちが}なって、居間を飛び出して御殿の天主閣へ向かう。そこではお附きの者に化けた悪魔が糸繰器械で糸を繰っており、王女はそれを取り上げて永い眠りについてしまう。やがて王と皇后を除く城中の人間が王女と共に眠ってしまい、100年後にこの国を通りかかった隣国の王子にとある老人が「私は神の使で、此宮を守つて居る者である」と声をかける。話を聞いた王子は御殿に足を踏み入れ、眠っている王女を見つける。王子がそばへ寄って王女を起こすと城は100年の眠りから覚め、そこに予言を授けた女神が登場して2人の婚約は成立するという内容になっている。

この話が掲載されている『女子文壇』は1905（明治38）年から1913（大正2）年にかけて発行された雑誌である³²。「小説」、「和歌」、「日記文」、「詩」など作品ごとに項目が分けられており、そのうちの「お伽噺」という欄に投稿されていたのがこの「永き眠り」である。ここでは「新しきお伽噺を制作すること」という条件がつけられており、「永き眠り」についても「今回は西洋種が多くて何となく翻譯臭くありましたが本篇の如きは先づ傑作と認めらるゝものでせう」と解説されていることから、この話が邦訳ではなく、大津市在住の内田八千代という人物の創作物語として評価されたことがわかる。しかしこの話は、糸繰器械に触れたことで永い眠りにつきた王女が、100年後に城を訪れた王子によって目

覚めさせられるという内容から、独自の創作童話ではなくグリム版の「いばら姫」を参考にし、翻案されたものであろう。

10) ⑩吉岡向陽訳「睡美人」

吉岡向陽訳「睡美人」は『家庭お伽噺』に収録されている邦訳である。吉岡訳では冒頭の予言者について、王妃が睡椅子に寄りかかってうつらうつらしていると、闇のなかから女神が現れて王女誕生の予言を授けるといふ、ペロー版ともグリム版とも異なる内容になっている。しかし、どちらの原文とも一致しないのは冒頭のみで、宴の招待者、贈り物の内容、王女の起こし方はペロー版、塔の戸に刺さった鍵、王女と共に眠る人々、王子との結婚で終わる結末などの点はグリム版とそれぞれ一致している。さらに、宴の招待者に用意されたものが、吉岡訳では「ダイヤモンドやルビーを鑲めた黄金の皿」となっているが、ペロー版では「ダイヤモンドやルビーの鑲められたカトラリー」で、グリム版では「黄金の皿」であるため、この点からも吉岡訳はペロー版とグリム版を混成した版とみなすことができる。

残念ながら、これと同じような構成の英訳を発見することはできなかった。しかしこの「睡美人」には、美人画などで知られた挿絵画家、鱈崎英朋によって描かれた3枚の挿絵が添えられている。このうちの2枚が、アンドルー・ラングの童話集（『*The Blue Fairy Book*」, 1889）³³に収録されている H. J. フォードの挿絵と酷似していることが調査によって明らかになった。ラング訳の『*Sleeping Beauty in the Wood*』はペロー版に忠実な訳であるが、それを改変した英訳も多い。したがって、吉岡はラングの改変版を底本に使用したのかもしれない。

訳者の吉岡向陽（1876-1937）は本名を吉岡郷甫^{きょうすけ}といい、東京帝国大学文科大学国文学部を明治32年に卒業後、東京大学講師、文部省図書審査官、視学官のほか、熊本第五高等学校、浦和高等学校、東京女子高等師範学校の校長を務めた人物である。また『小学国語読本』の編纂に従事し、吉岡向陽の名で『家庭お伽噺』や『家庭お伽文庫』を出版している³⁴。

11) ⑪日野蕨村訳「百年の眠」

日野蕨村訳「百年の眠」は『ドイツお伽噺』に収録されているグリム版の邦訳である。日野訳が原文と大きく異なっている箇所は、宴の招待者たちからの贈り物の内容である。グリム版では「徳、美、富」となっているが、日野訳ではこれが「不思議な玩弄物^{おもちゃ}」と改変されており、「それはそれは珍しい物、美しく^{ママ}しい物、お金を澤山かけて作^{こしら}へた物」とそれぞれ説明されている。したがって成長した王女についての描写も、日野訳では「美しくつて、高尚で、解り易くつて、それはそれはよく出来て居つたから誰でも一度見たが、最後、慾しくて堪らなくなるほどでした」と、賢女たちから贈られた「不思議な玩弄物」についての描写となっているのだ。王女への贈り物を日野が文字通り「物」とであると捉えたことによる誤訳か、底本の時点で「物」となっていたのかについては不明である。

訳者の日野蕨村（1860-1925）は本名を久津見息忠^{やすただ}といい、新聞記者として東京曙新聞、日本絵入新聞、萬朝報に勤務した経験を持つ人物である³⁵。

5. 使用辞書と底本の考察

本稿における成果としてまず挙げられるのは、先行研究では取り上げられていなかった邦訳の発見である。今回取り上げた 11 話のうち、②中村訳、③えい子訳、④中村訳、⑨内田訳は、おそらく今回の調査によって始めてその存在が確認されたものであろう。また、①井上訳以外の邦訳についても、内容の分析や考察はこれまでなされていなかった。

さらに、11 話の邦訳を分析したことで、邦訳者が使用したであろう辞書を確定することができた。老女が紡いでいたものが「亜麻」ではなく「麻」と誤訳されていることについて、当時の独和辞書を確認すると、ほとんどの場合”Flachs”は「亜麻」と訳されていることがわかった。たとえば、風祭甚三郎編訳『独和字彙』、田村化三郎編訳『袖珍獨和字典』、行徳永孝編訳『独和字書大全』、保科虎吉/高木甚平『袖珍獨和新辭林』などである。しかし福見尚賢/小栗栖香平編『挿画増訂 独和辞典大全』と福島鳳一郎訳『挿図 和譯獨逸字彙』の 2 冊では”Flachs”が「麻」と誤訳されていることが判明した。明治期におけるグリム版の邦訳のうち、ドイツ語からの訳であると考えられるものは②中村訳、④中村訳、⑤山君訳である。そしてこの 3 話はいずれも”Flachs”を「麻」と訳している。したがって、これらの邦訳で訳者が使用したと思われる辞書はおそらく上記の 2 冊であると考えられる。一方、英語からの訳であると思われるものは⑥橋本訳、⑧熊本訳、⑩吉岡訳、⑪日野訳であるが、そのうち”flax”を「麻」と訳しているものは⑧熊本訳と⑩吉岡訳である。当時の英語辞書を確認したところ、すべての辞書で”flax”は「亜麻」と訳されているが、梅村守編訳『和訳英字典大全』³⁶にのみ「亜麻」と「麻」の両方が記載されている。そのため、熊本と吉岡はこの辞書を使用した可能性も考えられるが、英語のほかにドイツ語の知識もあった熊本は、先に出版されたドイツ語教科書版の訳（中村訳②・④）を見て、同じように「麻」と訳したのかもしれない。もしくは、亜麻が日本には生育しないことから、日本の読者にわかるよう「麻」と訳したのかもしれない。そして、彼のこの訳語がその後の訳者にも踏襲されたのであろう。

各邦訳者が使用したと思われる底本も、先行研究で明らかにされていた①井上訳に加え、⑥橋本訳と⑧熊本訳についてもほぼ確定することができた。⑥橋本訳は冒頭で「小魚」が予言者として登場する点や城が茨に覆われる場面で「煙筒」が出現する点などが、1823 年に発表されたエドガー・テイラーの英訳と一致している。そして⑧熊本訳は王女の名前が「ロザモンド」であるという点が 1882 年のルーシー・クレインの英訳と一致している。その他の英訳でこれらの改変点が一致するものは確認できなかったため、⑥橋本訳はテイラー訳を、⑧熊本訳はクレイン訳を底本に使用した可能性が高いと思われる。

6. おわりに

明治期における「眠り姫 (いばら姫)」の邦訳は調査の結果、11 話存在することが判明した。そのうちグリム版の原文にほぼ忠実な訳は⑤山君訳の 1 話、ペロー版にほぼ忠実な訳は①井上訳の 1 話、グリム改変版は②中村訳、③えい子訳、④中村訳、⑥橋本訳、⑧熊本訳、⑪日野訳の 6 話、ペロー改変版は⑦『ABC 雑誌』掲載の 1 話、グリムとペローの内容を混成した改変版は⑩吉岡訳の 1 話、創作版は⑨内田訳の 1 話である。各邦訳で原文の内容が改変されている理由は 2 点考えられる。1 点目は底本の時点で改変されていたから、2 点目は日本の読者が理解しやすいよう邦訳者が改変したからである。前者の理由による

改変は、予言者が「蛙」から「小魚」や「女神」になっている点、城の旗が「煙筒」になっている点、戸に刺さっていた鍵が「金の鍵」になっている点、姫の名が「ロザモンド」となっている点などである。後者の理由による改変は、王女が眠りに落ちる場所が塔から「櫓」になっている点、老女が糸車で紡いでいるものが亜麻ではなく「麻」になっている点、王女の起こし方で、キスが「手を取る」、「助け起こす」、「ながめる」など別の動作になっている点などである。キスという表現を避けたのは、おそらく読者の年齢層や、性的な表現を避けようとする当時の道徳観からであろう。

改変の度合いは訳本の使用目的により異なる。②、④の中村訳、⑦『ABC雑誌』掲載の訳、⑧熊本訳などはドイツ語または英語学習のために訳されたものであり、③えい子訳、⑥橋本訳、⑩吉岡訳、⑪日野訳などは家庭での読み物として訳されたものである。前者は誤訳または底本時点で加えられていた改変は存在するが、邦訳者が意図的に内容を改変したと思われる箇所はほとんど見られない。語学読本という性質上、読み手に与える印象よりも訳の正確さが重視されたためであろう。一方で後者は、底本における改変点に加え、邦訳者が意図的に表現や内容を改変したと思われる箇所が多く見られる。これは⑥橋本訳が掲載された『独逸童話集』の序文にもあるように、読み手がとっつきやすく、また内容を受け入れやすくするための取捨選択や日本風の改変が必要と考えられたためであろう。主な読者層や、邦訳者が児童文学に対してどのような考えを持っていたのかによっても、訳の内容が異なるのである。

調査の結果、明治期の日本に導入された「ねむり姫（いばら姫）」は改変版も含めると半数以上がグリム版であることが判明した。この傾向は大正期になるとどう変化するのであろう。時代や訳者によって改変されていく「眠り姫（いばら姫）」の変遷を調べていくことが、今後の課題である。

注

- 1 岡田知子「"La Belle au bois dormant"の日本における受容—『西洋仙郷奇談』『睡美人』を中心に—」梅花女子大学大学院 修士論文、2015年
- 2 川戸道昭/榊原貴教/野口芳子編『日本におけるグリム童話翻訳書誌』ナダ出版センター 2020年
- 3 川戸道昭/榊原貴教編『児童文学翻訳作品総覧 フランス・ドイツ編—明治・大正・昭和・平成の135年翻訳目録』大空社、2005年
- 4 作中における「ソース」を「醤油」に変えるなど日本人にも伝わりやすい表現を選んでいる、または糸の繊維を「亜麻」ではなく「麻」と誤訳しているなど、正確な訳ではないものの話の流れには大きな影響が出ていないものも含む
- 5 「御法の母」の御法は「みのり」ではなく、「ごほう」とルビが振られているので、神仏の「教え」を知る母という意味で使われていると思われる
- 6 ロバートソースとは塩と胡椒と酢でよく煮込んだ玉葱にからしを加えて作るソースである 当時発明されたばかりであったそう（新倉朗子訳『完訳 ペロー童話集』岩波文庫 1982年 260頁）
- 7 岡田知子「"La Belle au bois dormant"の日本における受容—『西洋仙郷奇談』『睡美人』を中心に—」前掲書 33頁
- 8 *FOUR AND TWENTY FAIRY TALES*. Translated by J. R. Planché. London: G. Routledge & Co., 1858, 8-16.
- 9 『西洋仙郷奇談』には「奇因縁（美女と野獣）」、「妹背情（真の恋）」、「美王樹（アンギ

- レット)」、「碧鬚(青髭)」、「睡美人(眠れる森の美女)」、「燻娘(シンデレラ)」、「猫君(長靴をはいた猫)」、「母指(親指小僧)」、「巨鼻兒(デジール王子)」、「秘藏王(シェリー王子)」、「苦樂(寡婦とふたりの娘)」、「鬼若福若(ファタル王子とフォルチュネ王子)」が収録されており、J. R. Planchéの英訳本(*FOUR AND TWENTY*)にも同じ話が収録されている
- 10 岡田知子「"La Belle au bois dormant"の日本における受容—『西洋仙郷奇談』『睡美人』を中心に—」前掲書 30頁
- 11 福見尚賢/小栗栖香平編『挿画増訂 独和辞典大全』南江堂 1885年 802頁
- 12 同上 333頁
- 13 「亜麻」と正確に訳しているものは以下の4冊である
 風祭甚三郎編訳『独和字彙』後学堂 1887年 186頁
 田村化三郎編訳『袖珍獨和字典』南江堂 1895年 109頁
 行徳永孝編訳『独和字書大全』金原寅作 1890年 292頁
 保科虎吉/高木甚平『袖珍獨和新辭林』1896年 三省堂 488頁
 一方、「麻」と訳しているものは以下の2冊である
 福見尚賢/小栗栖香平編『挿画増訂 独和辞典大全』南江堂 1885年 333頁
 福島鳳一郎訳『挿図 和譯獨逸字彙』大倉書店 1889年 257頁
- 14 *Lesebuch für die mittlere und ober Stufe. Ausgabe C, Teil 3. Hrsg. v. Eduard Bock. Breslau: Hirt 1878, S. 39.*
- 15 *Ebd. S. 40.*
- 16 森鷗外/森於菟訳『しあはせなハンス』文芸春秋新社 1948年 あとがき 3頁
- 17 同上 あとがき 2頁
- 18 *German Popular Stories. Translated by Edgar Taylor, illustrated by George Cruikshank. London: Chatto & Windus 1898, 1st edition 1823, 51-57.*
- 19 *ibid. 51.*
- 20 *ibid. 54.*
- 21 早田宰「我が國における都市住宅像の形成過程—近世江戸期の影響を中心に—」『早稲田人文自然科学研究』53号 1998年 41頁
- 22 『20世紀日本人名事典』日外アソシエーツ 2004年 1977頁
- 23 中山淳子『グリムのメルヒェンと明治期教育学』臨川書店 2009年 167頁
- 24 橋本青雨訳『独逸童話集』大日本国民中学会 1906年 序文 12頁
- 25 『ABC雑誌』第3巻 第8号 東西社 1907年 147頁
- 26 *Three Fairy Princesses Snow White, Sleeping Beauty, Cinderella. London: Marcus Ward & Co., 1885.*
- 27 『家庭雑誌』第102号 家庭雑誌社 1897年 577頁
- 28 *Grimm's Fairy Tales. Translated from the German by Lucy Crane. New York: Hurst & Co., 1882, 204.*
- 29 『英学界』第6巻 第3号 有楽社 1908年 128頁
- 30 同上 129頁
- 31 長澤英一郎「學習院時代の熊本先生」『英語青年』第80巻 第10号 1939年 304頁
- 32 金子幸代/中村真也「愛読諸嬢—国際化と登山から見る『女子文壇』の研究—」『富山大学人文学部紀要』46号 2007年 266頁
- 33 *Lang Andrew, The Blue Fairy Book. London: Longmans Green and Co., 1889.*
- 34 国語教育研究所編『国語教育研究大辞典 普及版』明治図書出版 1991年 838-839頁
- 35 『新訂増補人物レファレンス事典 明治・大正・昭和戦前編Ⅱ』日外アソシエーツ 2010年 671頁
- 36 梅村守編訳『和訳英字典大全』字書出版社 1886年 282頁